



箱崎キャンパスの元寇防塁と近世甕棺墓

副センター長・歴史情報研究部門 宮本一夫
 九州大学埋蔵文化財調査室 三阪一徳・齋藤瑞穂

現在、九州大学埋蔵文化財調査室では伊都キャンパスへの統合移転事業に伴って、箱崎キャンパスの発掘調査を実施しています。ここでは鎌倉・室町時代と江戸時代の調査成果について紹介します。

現在の箱崎周辺は、延長元(923)年の菅崎宮創建を契機に、鎌倉・室町時代にかけ町が大きな発展をとげ、日宋貿易をはじめとする海上交通の拠点となります。他方、文永の役(1274年)直後、鎌倉幕府は再度の元(モンゴル)軍の襲来に備えて、香椎から今津にかけ約20kmにわたる元寇防塁(石築地)を築造し、博多湾一帯の防備を固めました。箱崎地区の元寇防塁は薩摩国が分担し、1年に満たない期間で築造されたといわれています。時を経て大正時代になると、再び元寇防塁が注目され、箱崎の地蔵松原で元寇防塁が発見されました。

そして、2016年度に、地蔵松原の南に隣接する箱崎キャンパスの旧中央図書館前南(HZK1603・HZK1604)地点で、元寇防塁と推定される石積み遺構が見つかり、大きな注目をあつめました。これ以降の調査でも相次いで石積み遺構が発見され、少なくとも南北約200m範囲に石積み

遺構が残っていることがわかってきました。2017年度に実施した旧中央図書館前北(HZK1706)地点では、南北6.5mの範囲に石積み遺構の基底石約5石が並んだ状態で発見されています(写真1)。

2018年度の旧理学部二号館前南第2次調査(HZK1802)地点では、石積み遺構とともに、その陸側(東側)ほど近くから溝状遺構が検出されました。ほかの地点でも、石積み遺構の陸側に5mほどの距離を置いて、幅7~15mの溝状遺構が存在し、両者は並行して南北にのびていることがわかっていました。ただし、溝状遺構が人工的なものであるのか、また石積み遺構との関係性については議論がありました。この課題を解決するため、本地点ではジオスライサーを用いた地質学的調査を実施しました(写真2)。その結果、溝状遺構は自然作用によって形成されたものではなく、人為的に掘削された可能性が極めて高いことが明らかになりました。さらに、出土した陶磁器の年代や放射性炭素年代測定の結果からは、石積み遺構と溝状遺構はほぼ同時期に築造され、両者は一連の構築物として防御機能を果たしたと考えられます。

以上のように、箱崎キャンパス内の発掘調査を通じ、元寇防塁と推定される遺構の詳細な立地や構造、機能が解明されつつあります。

一方、本年度調査した旧工学部船舶海洋工学実験室(HZK1801)地点では、江戸時代の墓地が姿をあらわしました。「元禄十七年」、「享保九年」などの墓石が出土している点や、埋葬した甕棺の特徴などから、おおそ江戸時代後半代を主体とする墓地と考えられます。

この調査では、700㎡の範囲から50基以上の墓が見つかっています。特にこのうちの18基からは人骨と副葬品と



写真1. 石積み遺構〔旧中央図書館前北(HZK1706)地点〕



写真2. ジオスライサー調査
〔旧理学部二号館前南第2次調査(HZK1802)地点〕



写真3. 近世甕棺墓
〔旧工学部船舶海洋工学実験室(HZK1801)地点〕

が極めて良好な状態で検出されました(写真3)。アジア埋蔵文化財研究センターとの連携のもと調査を進めた結果、被葬者の性別や年齢はもちろん、副葬品のバラエティや七星板と呼ばれるめずらしい葬具の存在など、この墓地がこ

れまで知られている例とはやや違った一面をもつことも明らかになっています。現在、この被葬者たちが生前どのような活動をしていたのか、様々な角度から検討を進めています。



高松市屋島に点在する石切丁場の現地調査報告

精密分析部門
比較社会文化研究院 中野伸彦

屋島は高松市の北東部に位置し、海面から標高280m付近までの急斜面と岩壁および山頂付近の平坦な台地状の地形で特徴づけられる。その山腹には15世紀以降の採石跡と考えられる石切丁場が多数存在する。

香川県高松市は、昨年度より「史跡天然記念物屋島に点在する石切丁場跡の歴史的価値に関する研究」を開始し、共同研究機関として九州大学アジア埋蔵文化財研究センターが、6ヶ年の期間中に複数回の共同現地調査と精密分析を含めた岩石学的解析を担当する。本研究のゴールは、屋島に多数存在する石切丁場において、「どのような」岩石が、「いつ」「どのように」採石され「どこに」流通したか?を明らかにすることであり、複数の専門家の目による観察・検証作業が必要不可欠である。ここでは、2018年12月13日～15日に実施した第一回目の共同現地調査について簡単に報告する。

同調査には、本研究センターから年代測定部門・小山内センター長をはじめ、文化財調査開発部門・田尻准教授、精密分析部門から足立助教と私の3部門4名が参加し、高松市からの参加者を含めて8名のパーティで実施した。調査地点は、屋島の洞窟内の穴丁場3地点と露天丁場3地点および男木島・女木島のそれぞれの穴丁場である。屋島の地質は、比較的単純であり標高200～250mまでは基盤岩である白亜紀花崗岩が産し、それよりも上部には安山岩が

分布する。北部には両岩体の境界に最大層厚30m程度の凝灰角礫岩が狭在し、今回調査した穴丁場は全てこの凝灰角礫岩層をほぼ水平に採掘している。一方で、露天丁場では比較的広い分布をしめす安山岩や花崗岩が採石されている。今回観察した穴丁場の規模は様々であるが、最も大きな規模である屋島洞窟は、およそ200mほどの奥行きをもつ。このように、非常に薄くてもろい凝灰角礫岩層を100m以上掘り進めるリスクな採石方法からも、同岩石の当時の価値の高さがうかがえる。

今回の調査では、いくつかの発見もあった。1つは洞窟内からくさびを発見したこと。このくさびの大きさが周囲の矢穴と全く同じであったことから、当時現地で使われていたものであることは間違いない。非常に価値のある資料となるであろう。次に、露天丁場での観察から、花崗岩よりもやや優黒質な閃緑岩も砕石していたことが明らかとなった。これに類似した岩石が高松城の石垣に利用されていることから、両者の対比もおもしろい。さらに、海岸での露頭から矢穴が認められたことは、これまで考えられていた「山腹で採石後運搬、海岸から輸送」という行程だけではなく、「海岸で採石そのまま輸送」という行程も存在したことを表す。今後、今回採取した約30点の岩石試料から、15世紀以降の時・人・物の移り変わりに関するさらなる新発見が生まれることを期待したい。



写真1. 洞窟での調査風景。屋島洞窟入口(左)と洞窟内(右)。



写真2. 三つ穴洞窟にて新たに見出したくさび。サイズは凝灰角礫岩露頭に残っている矢穴とぴったりと合う。

【センター活動報告】

2018年12月18日

第13回アジア埋蔵文化財研究センター 研究会

講演題目:「海底の戦跡、米軍艦エモズの地図化とその意義」

発表者: 菅浩伸 (比較社会文化研究院)

2018年12月22日 第1回国際研究集會

「モンゴル国における共同調査について」

モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所との共同研究

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター No. 18

発行: 〒819-0395 福岡市西区元岡744

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

編集: 仙田 量子

発行日: 2019年2月28日

TEL: 092-802-5653/FAX: 092-802-5662

E-mail: qa3rc@scs.kyushu-u.ac.jp

ホームページ <http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/>